

大学博物館等協議会 2023 年度大会
第 18 回日本博物科学会
大会案内・要旨集

2023 年 6 月 22 日（木）・23 日（金）

大学博物館等協議会 2023 年度大会・第 18 回日本博物科学会実行委員会

北海道大学総合博物館

大学博物館等協議会 2023 年度大会 第 18 回日本博物科学会 大会案内・要旨集

会期：2023 年 6 月 22 日（木）・23 日（金）

会場：北海道大学札幌キャンパス

大学博物館等協議会会長 西秋 良宏（東京大学総合研究博物館館長）
日本博物科学会会長 西秋 良宏（東京大学総合研究博物館館長）
大学博物館等協議会 2023 年度大会・第 18 回日本博物科学会実行委員会
委員長 坪田 敏男（北海道大学総合博物館館長）

ご挨拶

第 26 回大学博物館等協議会・第 18 回日本博物科学会の開催にあたって

長かったコロナ禍からようやく抜け出して、今回は久しぶりの対面形式による協議会と博物科学会を開催いたします。皆様におかれましては、4年ぶりの再会となりますので、多くの方が来道を楽しみにされていることと拝察します。ぜひ2日間の札幌滞在を堪能していただければと思います。北海道は、1年で一番過ごしやすい新緑の季節を迎えています。日常の忙しさから少し解放されてリフレッシュしてください。

さて、第18回目を数えることになった日本博物科学会ですが、本会の発足を発案されたのが当時本学総合博物館長だった藤田正一先生でした。今から17年前に北大での大学博物館等協議会に合わせて第1回日本博物科学会が開催されました。日も今回と全く同じ6月23日ということで、17年前の発足時の熱い思いを甦らせていただければと思います。この17年の中で、さまざまな議論が交わされたことと思います。新参者の私には十分に理解することはできませんが、その精神だけは受け継ぎたいと考えています。

第26回大学博物館等協議会のシンポジウムのテーマは「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」です。大学博物館全体でみるとボランティア活動を展開していない館が多いなか、すでに展開している各館が現状を伝え、共有することから始めるという意図を込めてみました。パネルディスカッションでは、とくに今後の課題について議論する予定ですので、多くのご意見をお寄せください。

北海道大学では、2026年の創基150周年に向けて準備が始まっています。総合博物館もバーチャルキャンパス事業の一部を担当することになっています。その中で3D映像を交えた新たな展示方法に挑戦していきます。この機会に、我が総合博物館を見学していただくと幸いに存じます。最後に、本協議会と博物科学会が参加される皆様にとって有意義なものになることを祈念しています。

北海道大学総合博物館館長 坪田 敏男

協議会・博物科学会 プログラム

6月22日(木) 会場：学术交流会館

12:00 受付開始(学术交流会館 入り口)

13:00 大学博物館等協議会 (会場：小講堂)

13:05 挨拶 実行委員長 坪田敏男(北海道大学総合博物館館長)

13:10 祝辞 北海道大学副学長 山本文彦

13:15 シンポジウム「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」

13:15 趣旨説明 坪田敏男(北海道大学総合博物館館長)

13:20

S-01 講演「広島大学総合博物館における学生・市民ボランティア活動の
成果と課題 ～ガイド、展示製作、デジタル、野外調査を通じて～」
清水則雄(広島大学総合博物館准教授)

S-02 講演「名古屋大学博物館学生運営スタッフ団体 MusaForum と取り
組む、地域社会貢献活動」
梅村綾子(名古屋大学博物館特任教授)

休憩(10分)

14:20

S-03 講演「ボランティアによる博物館機能の強化」
佐々木猛智(東京大学総合研究博物館准教授)

S-04 講演「北海道大学総合博物館におけるボランティア活動の紹介と
マネジメントの重要性」
湯浅万紀子(北海道大学総合博物館教授)

15:10 パネル・ディスカッション

15:40 休憩(10分)

15:50 大学博物館等協議会館長会議・日本博物科学会理事会
(会場：第1会議室)

日本博物科学会ポスター発表および博物館紹介ポスター
(会場：ホール)

16:50 休憩(10分)

17:00 大学博物館等協議会総会・日本博物科学会総会
(会場：小講堂)

18:00 散会

6 月 23 日（金）

9:00 日本博物科学会研究・口頭発表（会場：学术交流会館 小講堂＊）

挨拶 藤田 正一（博物科学会 名誉会員・北海道大学総合博物館 元館長）

9:15 口頭発表（3 題）

10:15 休憩（10 分）

10:25 口頭発表（4 題）

11:45 昼食

12:45 口頭発表（5 題）

14:25 休憩・移動（20 分）

14:45 特別見学会 ＊

（コース 1）北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

（博物館部門を中心に見学）

（コース 2）北海道大学総合博物館

17:00 散会

*会場から植物園（約 1.2km）・総合博物館（約 600m）までが徒歩での移動となります。

*会場で手荷物等をお預かりすることはできません。

口頭発表 プログラム

(6月23日(金)、会場：学术交流会館 小講堂)

【挨拶】

9:00-9:15 藤田 正一 (博物科学会名誉会員・北海道大学総合博物館 元館長)

【教育】

9:15-9:35

0-01 塩瀬 隆之 (京都大学総合博物館)
「生成系 AI の博物館展示論授業における活用と課題」

【研究】

9:35-9:55

0-02 ○本川 雅治・松沼 瑞樹・岡部 晋也 (京都大学総合博物館)
「第三高等学校が所蔵した明治期の動物標本」

9:55-10:15

0-03 寺門 臨太郎 (筑波大学芸術系)
「亡失石膏像の発見 — 東京高等師範学校の遺産とその利活用方途」

休憩 (10 分間)

【地域と社会連携】

10:25-10:45

0-04 ○永田 裕美¹・松本 由樹¹・伊藤 文紀²・寺林 優²
(¹香川大学大学院農学研究科・²香川大学博物館)
「博物館機能に期待される「むきあう」姿とは何か？」

10:45-11:05

0-05 ○松本 由樹¹・町川 和倫²・篠原 渉³・川崎 浄教¹・伊藤 文紀³・
寺林 優³ (¹香川大学農学部・²(株)富士クリーン・³香川大学博物館)
「日本初乾式縦型メタン発酵施設で実施した博物館ミュージアム・レクチャー」

11:05-11:25

0-06 ○鎌田 沙希¹・弘松 瑤希²・南葉 鍊志郎¹・清原 愛²・藤原 伊織³・
吉朝 開²・大崎 壮巳¹・野崎 このは⁴・黒島 健介⁵
(¹広島大学大学院統合生命科学研究科・²広島大学理学部・
³広島大学生物生産学部・⁴広島大学総合科学部・⁵広島大学総合博物館)
「学生スタッフ HUMs の活動～展示製作を通して～」

11:25-11:45

- 0-07 ○佐藤 琴¹・小幡 圭祐¹・堀井 洋²・小川 歩美²・大月 希望³
(¹山形大学附属博物館・²合同会社 AMANE・³東京大学大学院)
「地域の記憶「共創」アーカイブ事業—ななはく！と山形アーカイブ—」

昼食・休憩（60 分間）

【マネジメント】

12:45-13:05

- 0-08 ○齋藤 歩¹・天野 絵里子²（¹京都大学総合博物館・²京都大学学術研究展
開センター）
「「第 3 期中期目標・中期計画」に基づく京都大学研究資源アーカイブ
利用者満足度調査——結果と展望」

13:05-13:25

- 0-09 栗原 祐司（独立行政法人国立科学博物館）
「博物館法改正に伴う大学博物館の在り方」

【展示】

13:25-13:45

- 0-10 大喜 直彦（山形大学附属博物館）
「コロナ禍で来館者が・・・スタッフががんばった結果
「鎌倉殿とほか 3 人～大河ドラマに便乗展～」」

13:45-14:05

- 0-11 ○伊藤 謙¹・三島 美佐子²・船越 幹央¹・河原 源太¹
(¹大阪大学総合学術博物館・²九州大学総合研究博物館)
「創立 20 周年記念展「MOU 収蔵品展 - 創立からもう 20 年 - 」
を開催して」

14:05-14:25

- 0-12 中江 花菜（東京藝術大学大学美術館）
「展示什器としての額縁—旧額の調査研究を通じて」

ポスター発表 プログラム

(6月22日(木)、会場：学術交流会館 ホール)

【展示】

- P-01 山崎 達哉 (大阪大学中之島芸術センター)
「アートトリップ・ナカノシマ — モダン中之島コレクション・アネックス」

【教育】

- P-02 ○上田 裕尋¹・齊藤 有里加¹・金子 敬一^{1・2}
(¹東京農工大学科学博物館・²東京農工大学工学研究院先端科学部門)
「3D技術を用いた博物館実習の取り組みと課題」

【研究】

- P-03 ○松沼 瑞樹¹・甲斐 嘉晃²・本川 雅治¹
(¹京都大学総合博物館・
²京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所)
「京都大学所蔵の魚類タイプ標本の概要と整理状況」

【情報】

- P-04 ○村上 由美子・齋藤 歩 (京都大学総合博物館)
「京都大学総合博物館所蔵エジプト出土資料の研究資源化プロジェクト」

【地域と社会連携】

- P-05 ○松永 篤知・藤原 真理・足立 拓朗 (金沢大学資料館)
「令和4年度 Innovate MUSEUM 事業 (地域課題対応支援事業)
『金沢大学近代化遺産振興事業』の実施と成果」

- P-06 西川 治 (秋田大学大学院国際資源研究科附属鉱業博物館)
「あきた鉱山系資料館ネットワーク構築事業」実施報告

大会事務局からのお知らせ

参加者の皆様へ

- ・会費（参加費 2,000 円）は当日、受付でお支払いください。
- ・昼食は両日とも、北海道大学総合博物館カフェぽらす、北大生協・中央食堂、北大生協・クラーク会館店が利用可能です。コンビニエンスストア「セコマ」もあります。
- ・従来の大会では懇親会が行われておりますが、新型コロナウイルス感染症の蔓延が終息していない状況を考慮し、誠に残念ではありますが、今回は開催を見送ることにいたしました。なお、ミュージアムカフェぽらすの臨時夜間営業を予定しており、アルコール類の取り扱いもごございますので懇談会にご利用ください。
- ・会場で手荷物等をお預かりすることはできません。
- ・宿泊は各自でホテル等のご予約をお願いいたします。札幌観光協会のウェブサイトにも宿泊施設の一覧があります。下記をご参照ください。

<https://www.sapporo.travel/hotel-search/>

口頭発表について

- ・発表時間は 15 分、質疑応答・発表者交代に 5 分です。
- ・コンピュータ接続の液晶プロジェクタで PowerPoint を使用して行います。
- ・使用 OS・ソフトは Windows 10・PowerPoint 2016 もしくは Adobe Acrobat Reader DC です。発表ファイルを USB メモリに入れてご持参ください。PowerPoint for Mac をご利用いただく場合は、フォントや図の表示の不都合を避けるためにご自身でノート PC とコネクタをご持参ください。

ポスター発表・各館ポスターについて

- ・ポスター発表はプリントしたもの（最大 A0 縦・1 枚）を当日ご持参ください。
- ・ポスター発表・各館紹介ポスターの掲示期間は、6 月 22 日（木）12:00～6 月 23 日（金）14:30 です。
- ・ポスター発表（各館紹介ポスターを含む）は、6 月 22 日（木）15:50～16:50 および 6 月 23 日（金）12:00～12:30 までを説明の時間（コアタイム）とします。

特別見学会について

- ・北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下植物園）または総合博物館で特別見学会を実施します。植物園では、植物園内の博物館およびバックヤードのガイドツアーを行います。また総合博物館でも展示およびバックヤードをスタッフがご案内いたします。皆様のご参加をお待ちしております。
- ・特別見学会参加者は、博物科学会の口頭発表終了後に学術交流会館入口にご集合ください。スタッフが植物園または総合博物館まで引率いたします。
- ・会場から植物園（約 1.2 km）・総合博物館（約 600 m）までは徒歩での移動となります。

【北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園】



- 植物園へのアクセス
- JR 札幌駅南口より徒歩 10 分
 - 札幌市営地下鉄
南北線・東豊線 さっぽろ駅
6 番出口より徒歩 10 分
 - 南北線・東西線・東豊線大通駅
2 番出口より徒歩 10 分
 - 東西線 西 11 丁目駅
4 番出口より徒歩 10 分

駐輪場はありますが、駐車場はありません。

特別見学会以外でも、会期前後および会期中の 6 月 21 日から 24 日にかけて、大学博物館等協議会・日本博物科学会参加者は無料で入園することができますので、ぜひお立ち寄りください。入園の際は、受付で名札・要旨集を示すか、参加者であることをお伝えください。

なお、総合博物館は会期中も通常通り開館しており、入館料は無料です。

懇親会について

新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、今回は懇親会を実施しません。ただし、総合博物館カフェ「ぼらす」が 22 日（木）の散会後から 21 時ごろまで営業を延長し、アルコールを含む飲食物を販売します。実行委員会数名も待機している予定です。ご興味がありましたら、ぜひお越しください。

会場案内

【北海道大学札幌キャンパス】



1. 学術交流会館
2. 総合博物館
3. 北大生協・中央食堂
4. セコマ（コンビニ）
5. 北大生協・クラーク会館店

【札幌キャンパスへのアクセス】

北大最寄りの駅からのご案内

- ・JR 線をご利用の場合

札幌駅北口から構内まで (徒歩約 7 分)

- ・地下鉄南北線をご利用の場合

北 12 条駅から構内まで (徒歩約 4 分)

新千歳空港から札幌駅までのアクセス

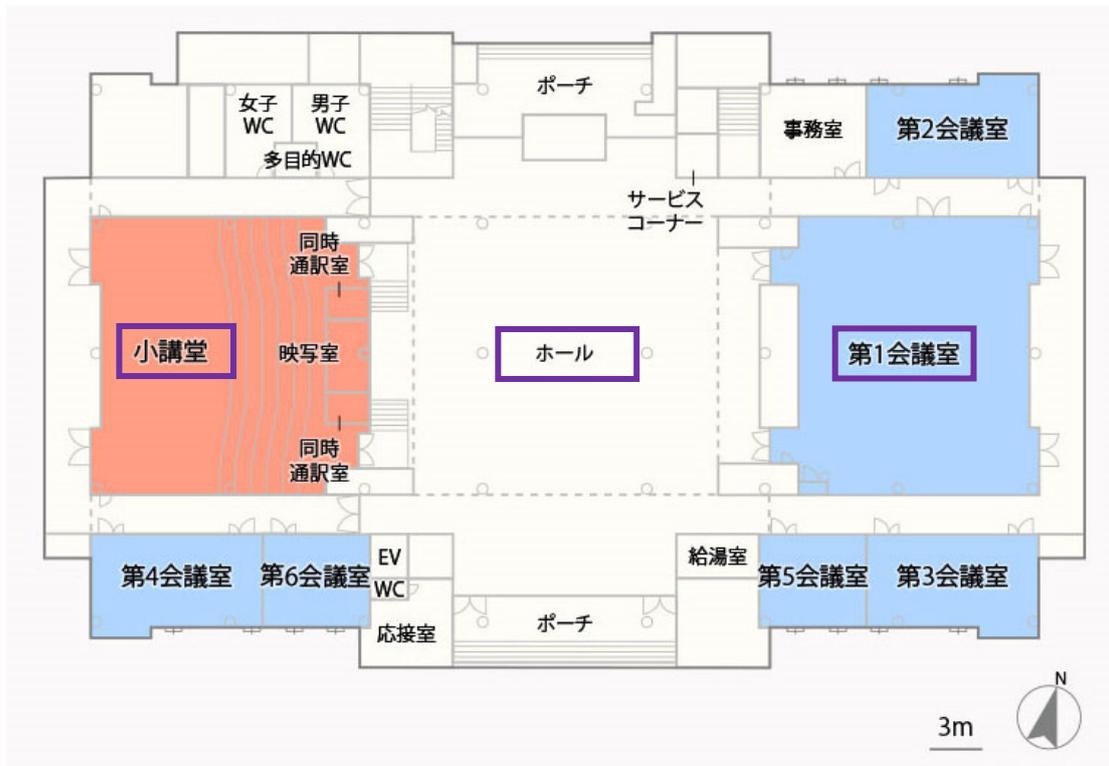
JR 線

快速エアポート 約 40 分

バス(中央・北都交通)

札幌都心行 約 1 時間 10 分

【学术交流会館】



協議会会場・口頭発表会場： 小講堂
 館長会議・理事会会場： 第1会議室
 ポスター発表会場： ホール

大学博物館等協議会シンポジウム

「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」

会期：2023年6月22日（木）

会場：北海道大学 学術交流会館

シンポジウム
「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」
開催趣旨

坪田敏男
(北海道大学総合博物館)

主として国立大学における大学博物館設立の契機となった学術審議会学術情報資料分科会による「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）」（1996）では、学術情報の保存・研究・教育の必要性、そして大学の広報機関としての役割への期待が提示されました。この報告から 25 年以上が経ち、現在は国公立、私立を合わせて 280 館以上の大学博物館が設置されています。大学博物館の使命には共通するものがあると同時に、その活動は各館が注力する目的や地域社会からの要請により多様に展開されています。

大学博物館の抱える課題と対応策を共有し、大学博物館の社会における意味を考えていくために、17 年前に北海道大学で開催された大学博物館等協議会において日本博物科学会が設立されました。各館の研究・教育・博物館活動の発表の場として、そして意見交換する場として、この 17 年間、さまざまなテーマを設定してシンポジウムが開催されています。

第 18 回となる今回は、「ボランティア活動」に注目します。全ての大学博物館でボランティア活動が展開されているわけではありません。既に展開している館は、超高齢社会における人びとの生涯学習の支援、大学博物館の社会貢献、開かれた博物館活動の一環としての意味、博物館の人材・予算不足の問題への対応策、あるいはリカレント教育としての可能性など、ボランティア活動の役割をどのように考えているのでしょうか。そして、具体的にどのような活動を行っているのでしょうか。また、ボランティア活動を支援する際の運営上の課題はあるのでしょうか。これらの点について、広島大学総合博物館と名古屋大学博物館、東京大学総合研究博物館、北海道大学総合博物館から事例報告していただき、皆さんと考える機会にしたいと思います。

大学博物館の使命の一つに、大学生・大学院生を教育する高等教育が挙げられます。シンポジウムでは、市民ボランティアだけではなく、大学博物館の重要なリソースの一つとも考えられる学生を巻き込んだボランティアに関する報告も予定されています。大学博物館独自のボランティア活動の展開を考える機会になることを願っています。

S-01

広島大学総合博物館における学生・市民ボランティア活動の成果と課題 ～ガイド、展示製作、デジタル、野外調査を通じて～

清水則雄
(広島大学総合博物館)

博物館の登録制度の見直しにより、各館の経営状況が厳しくなることが想定されています。これまで以上に、教育・研究分野におけるボランティア活動の重要性が高まっています。広島大学総合博物館は、2006年に大学独自の予算で作られたいわゆる第二世代の大学博物館で人員、スペース、予算ともに極めて厳しい状況で開館しました。必然的に、学生ボランティア、市民ボランティアの参画を得ながら博物館活動を展開してきました。

博物館草創期から、約250haもの広大なキャンパスをまるごと博物館と見立て、学生ガイドによる案内（キャンパスガイド）を地域連携センターと連携して実施しています。また、2011年からは、地域・大学・自治体が協働したオオサンショウウオの保護活動を実施し、学生ボランティア・市民ボランティアの参画による調査・研究活動を推進しています。近年は、博物館公認学生ボランティア HUMs（ふむず）による展示製作、企画展の開催、同じく公認学生ボランティア CSR（キャンパス・スチューデント・レンジャー）によるキャンパスの自然環境管理とデジタルミュージアムの運営など、ボランティアによる幅広い活動を展開しています。

これらの活動により、学生・市民の学びの深化、博物館活動の活性化・多様化、地元住民との密接な関わり（地域貢献）、自治体との結びつきなど数多くの成果が上がっています。

一方、業務の多様化・多忙化、教職員の個人的な献身的努力に依存している点、友の会等の安定した組織設立まで至っていない点など多くの課題も見えてきました。

本発表では学生・市民と協働したボランティア活動の実態、その成果と課題を紹介し、今後の持続可能な方向性を検討します。



多様な年齢層が集うオオサンショウウオの調査



CSRによる学内植物ネームプレートの設置

S-02

名古屋大学博物館学生運営スタッフ団体 MusaForum と取り組む、地域社会貢献活動

梅村綾子
(名古屋大学博物館)

名古屋大学博物館は「次世代に活かす博物館」をスローガンに掲げ、大学における高等教育や研究活動のほか、博物館の展示の見せ方および教育活動に取り組んでいます。特に教育活動においては、大学博物館の特徴を生かした活動の一つとして、大学生・大学院生らが博物館を通じていかに主体的に社会活動に従事する機会を得るか、そして経験を積み重ね、社会に巣立っていけるか、その一連を支援するような体制を整えていくことを課題とし、注力しています。

こうしたモチベーションのもと、2020年4月、有志の学生8名とともに名古屋大学博物館学生運営スタッフ団体「MusaForum (ムーサ・フォルム)」を発足しました(図1)。以来、2023年5月現在、学年・専門分野が様々な学内外の大学生・大学院生の現役スタッフ155名(累計212名)が登録しており、自身の興味・専門を活かしながら、博物館の地域社会貢献活動に取り組んでいます(図2)。

今年度4年目を向かえたMusaForumとの活動は、新たな可能性を拓いていくことを目指し、他館や自治体、財団法人、企業との連携や協力のもとに、地域とともにつくる活動に挑戦中です。学生からも、企画の提案や相談が随時飛び込んでくるようになってきました。

本講演では、MusaForumの立ち上げのきっかけとなった背景から、現在に至るまでの経緯において、多々直面した課題点などに触れながら、その体制づくりを中心にお話しします。



使命 真に「活かせる博物館」とは何か、そのためにはどうすれば良いか、考え行動に移す。
展望 博物館の「これまで以上の新たな価値」を見出す。

図 1. MUSAForum のロゴと、使命と展望。

●「出張！名大博物館」

名古屋市科学館や地域のショッピングモールを会場として、名古屋大学博物館の収蔵資料を持ち出し紹介するイベント「出張！名大博物館」を随時開催しています。

持ち出す資料は、学生スタッフが個々に選ぶ「押し標本」です。オリジナル作品として用意するパネルやハンズオン展示は、親しみやすさの他、標本への愛が詰まっているとして、好評です。

2022年 3月6日(日) 10:00-16:00
 会場：名古屋市科学館 生命館2階
 申込不要・参加無料（ただし、科学館入館料は必要）

イチョウ標本解説
 名古屋大学博物館の学生スタッフが、博物館の収蔵資料にある下町標本を紹介します。
 ・標本しよび「植物の心臓」
 ・色鮮やかなアザミのワックスアート
 ・宇宙天気を観測！あじさい標本

参加者にカンブリア爆発を解説している様子

●「みんなで！はなし math」

『数学は教科書に書いてある決まり事を使って、ある決まった答えを導き出すものなのか？』
 MUSAForumという学際的なメンバーの何気ない会話から生まれた疑問が、イベント企画になりました。

博物館の鑑賞法として注目されている“対話型鑑賞法”にヒントを得て、広く一般市民の方々と対話を通し、経験や価値観から、数学に対する知をともに育んでいくことを目指しています。

2022年 7月2日(土)
 第1部 10:50-11:50
 第2部 13:10-14:10

参加者の声
 「数学の根本がわからなかった」「考えを整理する力が身についた」「自分の考えについて議論が楽しかった」「いろいろな意見が聞けてよかった」

第2回
 「数学×対話」
 「論議って何だろう」「自分の意見をまとめてみよう」「意見を切り合ってみよう」
 開催：Zoom
 申し込み開始：6/10 13:00
 先着順（第1部4名、第2部3名）
 お申し込みはコチラから
<https://www.museum.nagoya-u.ac.jp/>

自分のことばと経験で
 数学を見つめなおしてみよう

主催：名古屋大学博物館
 協賛：名古屋大学博物館 1564-8621 名古屋大学総合博物館
 TEL 052-789-5747 <http://www.nmu-nagoya-u.ac.jp/>

「ボールを切り開いてみると」のフアンシーより

●「標本に学ぼう！ドキドキ考古探究」

標本の見方は、皆それぞれに自由です。学びの多様性や可能性に期待して、考古資料を手元にして考えてもらいました。また、自宅にて継続して調査・研究してもらえるよう、3Dデジタル資料の活用方法をアドバイスしました。

現在、3Dデジタル資料の、より具体的な活用方法を提案していくため、MUSAForum内に「3Dデジタル資料活用チーム」を創設し、活動を展開中です。

2022年 2/11と3/5
 2日間開催

オンラインセッション&レクチャー：標本をみてみよう
 2月11日(土) 15:00-16:00 会場：博物館講堂
 講師：博物館 2階 展示学 学生スタッフ

実演・体験：標本を使って調べよう
 3月5日(土) 10:00-15:00 会場：博物館講堂
 講師：博物館 2階 展示学 学生スタッフ

Q&A セッション「研究アドバイス」
 3月5日(土) 10:00-15:00 会場：博物館講堂
 講師：展示学 展示学スタッフ

対象：小学生～大人
 申込方法：WEB申込制 先着順 15名
 申込先：名古屋大学総合博物館 1564-8621
<http://www.museum.nagoya-u.ac.jp/>
info@museum.nagoya-u.ac.jp
 〒466-8601 名古屋市中区南大塚1-1-1
 名古屋大学総合博物館 2階 展示学 展示学スタッフ

参加者に須恵器を触って確かめてもらっている様子

●「地域ボードゲーム作成プロジェクト」

地域が抱える課題解決や地域振興などをテーマに掲げ、愛知建築士会名古屋名南支部、及び、いたばし地域ボードゲーム会と連携して、「地域ボードゲーム作成プロジェクト」に取り組んでいます。地域ボードゲーム作りのノウハウを学びながら、チームワークのもと、担当の学生スタッフそれぞれが実践的に準備を進めています。

オリジナルのボードゲームの完成後は、ボードゲーム体験を盛り込んだイベント企画を実施する予定です。地域ボードゲーム作りとその体験イベントの企画運営を通し、地域の方々とともに、地域の関心や学びを深める機会を創出していきます。

ボードゲーム勉強会の様子

図 2. MUSAForum と取り組む、地域社会貢献活動（一部）。

S-03

ボランティアによる博物館機能の強化

佐々木猛智

(東京大学総合研究博物館)

博物館におけるボランティア活動の重要性は増している。博物館にはより一層の研究活動、資料収集活動、展示公開活動、地域貢献活動などが求められているが、予算や人員の増加が期待できない状況ではボランティアに頼らざるを得ない。

博物館におけるボランティア活動の典型例は展示解説ガイドと資料整理である。他にも、イベントの運営補助、標本や容器の清掃、骨格標本などの標本作製、岩石から化石を取り出すクリーニング、標本データの入力、デジタル画像の作成など、様々な活動が世界各地の博物館で行われている。

東京大学総合研究博物館では現在以下のようなボランティア活動を行っている。

(1)展示解説（インターメディアテク展示室）：学生ボランティアによる展示解説。学内外から学生の参加者を広く募集している。

(2)展示解説（博物館本館展示室）：シニアの方を中心とする展示解説のボランティア。

(3)標本整理ボランティア：鉱物、古生物、貝類、植物、考古学の分野で行っている（図 1-3）。植物のみ週 1 回、他は月に 1 回程度開催。

展示室の運営はボランティアに大きく依存しており今後もその重要性は変わらない。一方で、標本整理ボランティアは以前より重要性が増している。標本は年々増え続けるが博物館の人員は増えない。少ない人員でより多くの標本を維持管理しなければならなくなっており、その状況は年々悪化している。これがボランティアによる支援が欠かせない理由の一つである。

理想的には博物館のあらゆる活動にボランティア支援を取り入れたいが、当館では展示解説と標本整理の範囲に留まっている。現状でのボランティア活動の課題は以下の 5 点である。

(1)マネジメント：ボランティア活動を円滑に行うためには、教職員とボランティアメンバーとの連絡や調整が必要であるが、この業務は手間を要する。人数が増大する程この業務は煩雑になり、マネジメントを専任できる人材を確保したい。様々なデジタルツールによる効率化を図ることも可能であるが、シニアメンバーの中には対応困難な方が存在するため一律には導入することは困難が伴う。

(2)モチベーション：ボランティアは雇用ではないため、モチベーションが維持できる工夫が必要である。例えば、非常に単調な作業を長期間にわたって依頼し続けるとモチベーションが低下するため、内容に変化を付けるなどの配慮が必要である。整理を依頼した標本が実際に展示されるなど、作業の成果が実感できれば非常に喜ばれる

ため効果的である。

(3)世代分布：学生ボランティアは卒業後の継続が困難である点に制約があるが、若さと体力がある点に利点があり、大学教育上の効果も期待できる。シニアメンバーは年々高齢化している上に、コロナ禍で人数が減少し回復できていない。以前であれば多様な年齢層の主婦の方がボランティアに多く参加されていたが、最近は共働きが多いため、学生ボランティアかシニアボランティアかのどちらかに偏る傾向が強まっている。

(4)専門的知識や技能を有する人材：研究事業協力者として、生物標本の分類学的同定を依頼している例があり、これも高度なボランティアの一種である。引退された研究者か、在野の研究者で高度な知識を持つ方（パラタクソノミスト）がその例である。しかし、そのような依頼をできる人材が非常に限られている上に、後任を見つけることも困難である。専門的知識や技能を有するボランティアの存在は博物館にとって非常に大きな戦力になる。

(5)標本整理の空間：整理のためにボランティアで占有できるスペースが無いため、毎回資料や道具類を保管場所から全て移動させる必要があるため苦労している。

博物館の標本は長い間ボランティアの貢献によって守られてきた。それにより展示公開事業や大学教育が可能になり、博物館の活動が維持できている。今後、人口減少による人手不足が深刻化すれば、博物館教職員とボランティアとロボット（AI）の協働という時代が来るかも知れない。実際に展示室に解説ロボットを実験的に設置している博物館が既に存在する。例えば、外国語による外国人対応はAIによるチャットの活用が効率的であるかもしれない。一方で、ボランティア解説員は自らが解説をすることに熱意を持っているため、ボランティアの活動の場を機械に置き換えることは問題がある。多くの博物館の現場ではAIによる自動化は早急には実現しないと思われるため、当面は人手不足の中で博物館教職員とボランティアが知恵を出し合って博物館活動を推進することが求められている。



図 1-3. ボランティアによる標本整理の例。1. 整理作業中の光景。2. 整理前の標本。アンモナイトの標本が剥き出しで紙箱に入っている。3. 整理後の標本。袋に入れられ標本番号が添付されている。

S-04

北海道大学総合博物館における ボランティア活動の紹介とマネジメントの重要性

湯浅万紀子
(北海道大学総合博物館)

北海道大学総合博物館では、当館の使命を果たすことにご協力いただき、生涯学習を支援することを目指し、札幌キャンパスでは 2001 年度から約 180 名の市民と学生のボランティアが次の 15 グループで活動しています（以下、発足順）。1) 植物・菌類資料に関する収蔵管理と標本作製、2) 昆虫標本作製と整理、3) 考古学資料の整理と動物骨格標本の作製、4) メディア、5) 化石標本の整理・クリーニング作業、レプリカ作り、6) 北大の歴史、7) 展示解説、8) 平成遠友夜学校、9) 4D シアター、10) チェンバロ、11) 図書、12) 重要文化財 札幌農学校第 2 農場の展示支援、13) ハンズオン、14) 中庭整備、15) 地学。一方、函館キャンパスでは 10 年ほど前から、約 20 名の学生ボランティアが標本整理を行っています。ボランティアには交通費・謝礼は支給せず、無償の活動としていますが、ボランティア活動保険には館が費用を負担して加入しています。

これらの活動を紹介するとともに、ボランティア活動の推進に不可欠なマネジメントの実際とその留意点について説明します。具体的には、登録手続きの流れ、グループ担当教員とマネジメント担当スタッフの役割分担、研修、自主的な活動の支援、5 年・10 年表彰、市民と学生が混在する活動における生涯学習支援と学生教育に関する考え方などについて、当館の事例を紹介します。今後、ボランティア活動の支援の開始を検討している館をはじめ、関心のある館の参考になれば幸いです。

最後に、ボランティア活動への参加動機や活動への思いなどについてボランティアにインタビューした内容を紹介し、大学博物館におけるボランティア活動の意義と課題を考察します。



2021 年度学生企画動画（博物館公式 YouTube にて公開中）

「おいでよ 北大総合博物館～北大生から見た魅力～ 知られざる化石ボランティアの活動を覗いてみよう編」より

第 18 回日本博物科学会発表要旨

会期：2023 年 6 月 22 日（木）・23 日（金）

会場：北海道大学 学術交流会館

中之島芸術センター開館記念展覧会
「アートトリップ・ナカノシマ——モダン中之島コレクション・アネックス」

山崎達哉（大阪大学中之島芸術センター）

2023 年 4 月、大阪大学発祥の地、中之島に「中之島芸術センター」が誕生しました。10 階建ての大阪大学中之島センターを大改修し、その 3 階 4 階を使用している施設で、大阪大学での芸術の研究、教育の拠点として運用される予定です。大学院の授業だけでなく、社会人教育も開講して活用する予定です。また研究と教育に加え、芸術の実践も行える場として、3 階には上演、講演などに使用できる、楽屋・工房を併設したスタジオ、4 階には展示室、作業室、収蔵庫など展覧会のための施設が設置されています。スタジオ、展示室ともに、広く社会へ開いていく芸術イベントの実施を予定しています。

現在、4 階展示室では、2023 年 5 月 2 日から、中之島芸術センター開館記念の展覧会「アートトリップ・ナカノシマ——モダン中之島コレクション・アネックス」を開催しております。これは、大阪の中之島地域ゆかりのアート作品を展示した展覧会で、2022 年 4 月に大阪大学総合学術博物館で開催した第 16 回特別展「モダン中之島コレクション “大大阪”時代の文化芸術発信センター」に新資料を加えて再構成した展覧会です。中之島に関連する美術、音楽、演劇などの作品・資料のほか、建築や都市美、観光等に関する資料を展示しており、中之島地域と芸術の関係性や中之島という地域の特性を考える展示となっています。さらに、大阪大学が実践してきたアートプロジェクトや中之島地域を活用した今後のプログラムについても深める内容となっています。展覧会にて時空を超えた旅をした後は、現代の中之島地域を旅していただけたらと考えています。



P-02

3D 技術を用いた博物館実習の取り組みと課題

○上田裕尋¹・齊藤有里加¹・金子敬一^{1,2}

(¹東京農工大学科学博物館・²東京農工大学工学研究院先端情報科学部門)

近年、博物館において、フォトグラメトリーや 3D スキャンといった 3D 技術の利用が急速に増加している。3D 技術は、まだまだ活用の敷居が高いと感じられてしまう技術ではある。しかし、今後の博物館の発展において非常に強力なツールであることは間違いない。これらの技術の活用をより進めていくために、学芸員養成課程でも学生にこれらの技術に触れてもらい、その利点や問題点の理解を深めてもらう必要がある。

東京農工大学附属の科学博物館では、学芸員養成課程の博物館実習を通年科目として開講している。東京農工大学は松村任三と藤井健次郎により明治 35 年に作成された「植物学教授用掛図」8 点を所蔵しており、2022 年度の実習では、これらを起点に、学生たちは自らの専門や興味に従って、植物学について来館者との双方向コミュニケーションを可能とする展示を企画した。約 30 名の履修生が 4～6 人のグループに分かれてブースを作成し、そのうち 1 つのグループは 3D 技術を用いて種子散布について来館者と対話・解説する展示を作成した。実物の種子標本をフォトグラメトリー技術によって 3D モデル化し、拡大模型を 3D プリンターで印刷した。この模型をハンズオン展示として来館者に手で持ってもらいながら種子の形や特性を感じてもらい、種子散布への理解を促した。

本実習は、単にフォトグラメトリー技術などを学生に知ってもらうだけでなく、実際の展示における用途をあらかじめ設定し、それに合わせて技術を活用してもらうという新たな取り組みとなった。また、植物学と 3D 技術の融合は、農学部と工学部からなる本学の学生にとって良い刺激となったことが授業アンケートから確認できた。一方で、実習時間内で 3D 技術のすべてを学生に体験してもらうことは難しく、学芸員の負担が大きいことも確認できた。本発表では、昨年度の博物館実習において明らかになった 3D 技術を用いた教育の有用性と問題点、今後の展望についてまとめる。



京都大学所蔵の魚類タイプ標本の概要と整理状況

○松沼瑞樹¹・甲斐嘉晃²・本川雅治¹(1 京都大学総合博物館・² 京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所)

京都大学に所蔵されている魚類標本コレクションには現在までに約 20 万点の標本が登録され、最初期の標本は 1920 年代に採集された。分類学上で最重要なタイプ標本の点数はコレクションの歴史や規模を反映し、京都大学の魚類標本コレクションには 242 名義種のタイプ標本が含まれ、そのうち約 180 標本が担名タイプに指定されている。これは日本国内でも有数の規模である。しかし、京都大学の魚類タイプ標本は完全に整理されていない状況にあり、全容の把握はなされておらず、所在の確認がとれていない標本もある。現在、京都大学に所蔵されている魚類タイプ標本の由来は大きく 4 つある。1 つは、農学部の松原喜代松博士によって設立されたコレクション（機関略号は「FAKU」）で、これは京都大学の中心的なコレクションで、舞鶴水産実験所と総合博物館において現在も継続して標本の収集と登録がされている。2 つ目は、和歌山県の瀬戸臨海実験所に保管されている約 50 点のタイプ標本を含むコレクション（SMBL）で、その一部は現在では舞鶴水産実験所と総合博物館の FAKU コレクションに統合されている。3 つ目は、みさき臨海研究所のコレクション（MIKU）で、同研究所は南海電気鉄道株式会社が運営していた大阪府岬町の「みさき公園」内に設立され、松原博士が所長をつとめた。MIKU には約 20 点のタイプ標本が含まれるがその多くが行方不明となっている。4 つ目は、滋賀県の大津臨湖実験所で保管されていた魚類標本で、同実験所は現在の生態学研究センターの母体の一つである。大津臨湖実験所のコレクションは十数点のタイプ標本を含まれ、これらは総合博物館で保管されている。このように京都大学の魚類タイプ標本は、学内外の 4 つの研究機関に由来するもので、それ故に当時の保管状況も様々で、最終的には舞鶴水産実験所と総合博物館に集約されたがその経緯も複雑であった。このことがタイプ標本の全容の把握を困難にしている原因であろう。本発表では、京都大学の魚類タイプ標本の概要と、現在おこなっている整理と目録化の作業について紹介したい。

P-04

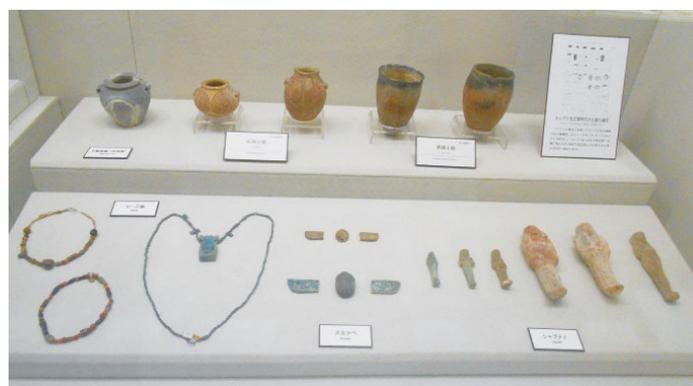
京都大学総合博物館所蔵エジプト出土資料の研究資源化プロジェクト

○村上由美子・齋藤 歩
(京都大学総合博物館)

京都大学総合博物館が所蔵するエジプト出土資料は、日本考古学の礎を築いた濱田耕作が1909-1931年にかけて収集したもので、パピルスやトキミイラ、ギリシア人植民都市ナウクラティスの彫像片など多様な資料を含んでいる。これまで企画展「埃及考古」（2011年）や資料目録刊行（2016年）などを通してコレクションについて発信してきたが、国内外の専門家や一般の愛好家からの需要に十分に応えることは難しい状況であった。

そこで、京都大学研究資源アーカイブの「研究資源化プロジェクト」（2020-2022年度）に申請し、考古学者とアーキビストが連携することで、既存の資料写真のアーカイブ化と公開を進めることとした。当館のエジプト出土資料については、関西を中心に活躍した文化財写真家の寿福滋氏により2011年から2018年にかけて撮影したアルバム12冊（紙焼き1940カット）分の写真がある。おりしもフィルム撮影からデジタル撮影に移行する時期にあたり、同じ遺物群が一人の写真家によりフィルムとデジタルの双方で記録されているという写真技術史の上でも貴重な資料と位置づけられる。2019年に逝去された寿福氏のご遺族から総合博物館へ著作権を譲渡していただいたうえで、アーカイブ化に着手した。

プロジェクトは昨年度に終了してフィルム写真を含むすべての画像のデジタル化と基本データの入力作業は概ね完了し、現在はデータの調整と京都大学研究資源アーカイブシステム（Peek）からの公開準備を進めている。京都大学研究資源アーカイブは、総合博物館が運営責任部局となっており、対象は総合博物館の資料に限定されないが、総合博物館の各分野の専門家とアーキビストが共同するプロジェクトを進めやすい状況にある。研究資源化の作業を進める過程で、1920年代にイギリスで刊行された発掘調査報告書に掲載された当該資料の確認や、遺物に直接書き込まれた注記情報の確認などを進め、資料についての情報の更なる蓄積と更新を進めてきた。今夏予定の公開に向けて、さらなる充実化を図りたい。



令和 4 年度 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業） 「金沢大学近代化遺産振興事業」の実施と成果

○松永篤知・藤原真理・足立拓朗
（金沢大学資料館）

近年、石川県または金沢市では、地域活性化、地域ブランドの向上、観光資源の振興といった諸課題に対し、新しい視点・手法による解決策が求められている。そのような中、金沢大学では貴重な近代化遺産を構内に保有していることから、近隣他館の近代化遺産もあわせて「新たな観光文化資源」として利活用する新たな事業案が浮上してきた。

そこで、金沢大学資料館では、文化庁令和 4 年度 Innovate MUSEUM 事業（地域課題対応支援事業）に「金沢大学近代化遺産振興事業」を申請したところ、有難いことに採択を受けた。本発表では、その実施と成果について報告する。

本事業では、近代化遺産を所有する近隣館・関係館との連携を構築した上で、10 月に事前アンケートを実施し、金沢市内における近代化遺産の認知度を把握した。それを踏まえて 11 月 27 日に「近代化遺産シンポジウム 金沢 2022」を開催し、160 名もの参加があった。このシンポジウムでは、4 名の専門家による研究発表と、連携館関係者も加わった討論会を行った。さらにシンポジウム終了後に、大学構内の近代化遺産を巡るキャンパス・ツアーも実施した。半日のイベントであったが、学内外の多くの方々に近代化遺産について知っていただける絶好の機会となった。

その後、2 月 10 日から 3 月 13 日にかけて、資料館展示室にて連携企画展「金澤モダン～金沢大学ゆかりの近代化遺産・近代遺跡を訪ねて～」を開催し、来館者数が減少する春休み期間ながら 365 名の来館があった。

今回の「金沢大学近代化遺産振興事業」によって、多くの方々に金沢大学と連携館の近代化遺産を認知していただき、理解を深めていただくことができた。事後アンケートでは近代化遺産の保存・活用への貴重な意見も寄せていただき、今後のさらなる近代化遺産振興につなげていきたい。

P-06

「あきた鉱山系資料館ネットワーク構築事業」実施報告

西川 治

(秋田大学大学院国際資源学研究科附属鉱業博物館)

令和4年度 Innovate MUSEUM 事業に採択された「あきた鉱山系資料館ネットワーク構築事業」では、鉱業博物館が中核施設となり県内の4つの鉱山系資料館と連携して資料館活性化のための事業を行った。以下、実施内容と成果を報告する。

交流会：資料館関係者30名が一堂に集まり、活動状況の報告と意見交換をおこなった。多くの資料館から、恒常的 personnel 不足や学芸員の不在により資料管理が行き届かず、展示の更新もままならない状況にあることが報告された。さらに近年、コロナウィルス感染症の流行に追い打ちをかられ、運営が困難な状態に陥っている館もあることがわかった。

資源関連分野の研修：専門分野の学習の機会が少ない資料館スタッフの基礎知識の底上げとモチベーション維持を目的に、オンデマンド講座・講演会・鉱山見学会など様々な研修を企画した。オンデマンド講座では、資源・環境分野の8講義を提供した。専門的な内容にもかかわらず講義内容の満足度は高く、多くの受講者のニーズをとらえているといえる。また、各資料館は地理的に孤立しておりオンデマンド方式による視聴方法にメリットがあったが、受講者の約半数はネット環境になかったため、講義DVDも作成し配布した。

デジタルアーカイブ作成と公開：代表的標本を写真やX線CT画像として記録した。これらのデジタルアーカイブを用いて、標本の魅力を伝える3Dコンテンツを制作し各資料館で同時公開した。これらのコンテンツは、画像表示ソフトを使用すればパソコン上で、回転・拡大・断面表示等の操作が自由自在にできる。しかし、資料館スタッフのほとんどがPCの操作に不慣れなため、予め編集した動画ビデオを自動再生する方式を採用した。

成果と課題：本事業を通して、地方の資料館では運営に携わる人が極限まで減少し活動に支障をきたしている現状が浮き彫りになった。また、基本的なスキルがなく、便利なデジタルツールを活用できないなどの問題が明らかになった。これらの問題に単独で対処するのは難しく、県内の資料館が連携し協働することが求められる。本事業によってその枠組みを構築することができた。しかしながら、現状では、参加館が相互に交流し支えあう多方向のネットワークにはなりえず、鉱業博物館が地方の資料館の運営や活動をサポートする一方向の関係性とならざるを得ない。

生成系 AI の博物館展示論授業における活用と課題

塩瀬隆之

(京都大学総合博物館)

2022 年 11 月にリリースされた chat GPT をはじめとする生成系 AI が様々な分野で注目を集めている。世界各国の大学教育においても、その技術進化に対する反応は全面使用禁止と忌避する態度から、まだ様子見でいずれの態度も決めあぐねている曖昧なものまで様々である(2023 年 5 月現在)。日本博物科学会、大学博物館等協議会に関連する教員、研究者の普段の展示業務や学芸員養成課程教育でも、関心のある方も多と思われる。そこで、博物館展示論の講義において筆者が取り組む「生成系 AI を活用した展示企画会議」や「事前炎上評価」といった事例を叩き台として、今後の活用方法について議論したい。

対話型 AI そのものの歴史は古く、起点の一つとして紹介されることの多い ELIZA が開発されたのは 1966 年に遡る。精神療法におけるインタビュー技法に似た応答定型文と構文解析で得たユーザーの語彙を組み合わせることで、対話内容に関する知識を持たなくても応答するよう見えるため、ユーザーがひとりでの対話を継続させ、悩みを打ち明けたり、泣き出したりするほどのめり込む例が多数報告された。1990 年代後半のインターネットブームで普及したチャットボットと呼ばれる自動応答システムの源流とも言われており、2010 年代には一部の携帯端末に搭載されるなど、どこまでも機械との応答経験は広くユーザーに浸透してきた。そのなかで、chat GPT がここまで注目を集めた理由の一つには、大規模言語モデルの開発が一つの臨界点を越えたことにあり、計算資源の投入規模に応じて飛躍的にその性能をスケールさせられることを示したことで、応答の質的向上から当該分野の専門性を有しなければその真偽を判断することが難しいまでの応答を実現したことにある。これは博物館での「展示」における情報伝達の構図、すなわち専門家である研究者や学芸員が、非専門家である一般来館者に向けた情報伝達場面と酷似しており、効率化や代替、はたまた無用の長物か、簡単に無視はできない。生成系 AI が生み出すテキスト情報の中には、まだ専門家からみれば誤答や最新でない情報(2023 年現在は、2021 年 9 月までのデータ)に過ぎないと揶揄する声も少なくないが、情報の信頼性が計算資源のさらなる投入で改善されるスケール則は過小評価できない。学芸員資格を得ようとする候補者がこの技術を安易に鵜呑みにして資料説明やキャプション情報などを作成することは本末転倒であるが、過小評価で忌避してしまうことも避けるべきである。

第三高等学校が所蔵した明治期の動物標本

○本川雅治・松沼瑞樹・岡部晋也
(京都大学総合博物館)

京都大学総合博物館では、2023年3月に教養部と第三高等学校に由来する脊椎動物標本目録を出版した。そこで調査した明治期の動物標本340点の知見を紹介する。第三高等学校は1894(明27)年に設立され、宍戸一郎が教授に着任した1899(明32)年より、動物標本群の形成がはじまった。それ以前の1888~89(明21~22)年に東京周辺で採集された鳥類標本(採集年月日や産地の分かるもので38点)が注目された。帝国大学理科大学を1888年に卒業した宍戸が採集した標本も含まれることから、同大学や講師だった飯島魁と関係する標本であることが示唆された。また、1890~92(明23~25)年の4点の骨格標本は、東京・上野の坂本福治製作であり、これらも同大学由来と推測される。第三高等学校設立以降は、動物標本社、島津製作所標本部、東京教育品製造合名会社からの購入標本が多い。1897~98(明30~31)年の沖縄県産爬虫類4点、1902(明35)年の台湾産キョン、1904(明37)年の北海道産ユーラシアカワウソなど、日本の動物学初期の興味深い標本が含まれる。1905(明38)年のカモノハシは、系統分類の中で単孔類を学ぶ標本であったと推測され、1900(明33)年のオガサワラオオコウモリも同様に飛翔哺乳類を知るための標本であったのだろう。第三高等学校の動物標本は、珍しい種から普通種まで、当時の標本群が散逸することなく残されている点で貴重な標本群である。帝国大学理科大学を中心とした人の関係(人脈)に加えて、標本の移動やつながり、いわば「標本脈」にも着目した、明治期の標本群を収蔵する博物館の共同研究により、明治期の動物学における教育や研究の史的な理解がさらに深まることが期待される。

亡失石膏像の発見 —東京高等師範学校の遺産とその利活用方途

寺門臨太郎
(筑波大学芸術系)

本学のアートとデザインに関する教育・研究諸領域のうち、とくに伝統的な美術（＝絵画と彫刻）のアカデミズム教育は、デッサン実習室のための「大石膏室」に象徴される。国公立の美大や美術学部、教員養成系学部のほとんどが石膏室での実習をすでに行っていないのに対して、本学の石膏室は現役である。床面積 315 平米で天井高 10 メートル超の空間中央には、イタリア・ルネサンスの巨匠ミケランジェロによる像高 5 メートル超の大理石像《ダヴィデ》の原寸大の石膏製模像が屹立し、数十の石膏像がそれを囲む。

昨年度末、発表者は学外研究者とともに美術教育史ないし美術史の一次資料としての石膏像の所在調査の一環で、「大石膏室」を調査した。それにより、戦前期製造と目される石膏像 1 躯がみつかった。すでに教材としての役を終え、木炭粉や砂埃を被り長年亡失されていたこの像には、彫刻家、菊地鑄太郎（きくち・とうたろう、1859～1945）の石膏模型製作所による「T.K.」の銘板が確認された。この製作所の開設期間が 1880 年前半から 1940 年代前半に限られることに鑑みると、当該の石膏像は東京高等師範学校で使われていたと推測できる。同様の古い石膏像は元来教材でしかなかったため多くが毀損遺棄されてしまったため、東京芸術大学、多摩美術大学、京都工芸繊維大学での現存例とならび、きわめて貴重である。

今回みつかった石膏像は、東京高等師範学校に淵源をもつ高等教育機関での美術教育に関する歴史的な検証に資する一次資料としての利活用方途の可能性をもつ。くわえて、それが置かれていた「大石膏室」は目下実習室としての機能しかないが、欧米における彫刻および彫刻史の研究のための模像コレクション展示の「キャスト・コート cast court」に類する空間とすべく再整備することで、石膏像じたいにも新たな学術資源としての役割を与えられる可能性が拓ける。



O-04

博物館機能に期待される「むきあう」姿とは何か？

○永田裕美¹・松本由樹¹・伊藤文紀²・寺林 優²
(¹香川大学大学院農学研究科・²香川大学博物館)

香川大学博物館は、知的財産の収集・保管・研究活動、教育・研究型の博物館として、15周年を迎えた。近年、博物館法制度の今後の在り方について議論され、これまでの役割に加えて福祉、教育、産業その他の関連分野においてもその中核となり得る可能性も議論されてきた。特に、障害者の個性と能力の発揮及び社会参加の促進を図る目的で、博物館や美術館などバリアフリー化も進んだ。一方で本学では医療従事者が展示協力した事例はなく、障がい者の目線でどのような展示や協力が必要かは不明な点が多い。本発表では、身体・心身機能評価・精神分析を強みとする作業療法士の協力が、環境整備に言及できる可能性について考察し、博物館活動において障がい者が利用しやすい為の情報や、障がい者の視点の重要性について触れる。加えて、「障害者権利条約」について言及し、障がい者抑圧に対する告発文『Nothing About Us Without Us』や、地域包括ケアシステムにおける作業療法士の役割についても紹介する。最後に、「博物館活動に関わることで、社会の形を変えていく場の形成に繋がる」博物館活動がその中核になれる可能性についても言及するものである。

日本初乾式縦型メタン発酵施設で実施した 博物館ミュージアム・レクチャー

○松本由樹¹・町川和倫²・篠原 渉³・川崎浄教¹・伊藤文紀³・寺林 優³
(¹香川大学農学部・²(株)富士クリーン・³香川大学博物館)

香川大学博物館では「発酵めぐみ」2022年7月19日から11月19日まで発酵や微生物のはたらきに関連した発酵に注目し、樹液や昆虫が集まるメカニズム、建築分野などにも関係した暮らしに身近に感じられる企画展を開催した。会期中には5回のミュージアム・レクチャーを開催し、バイオミミックな技術を用いた県内研究機関や企業と協働する事で地域資源の資源循環に目を向ける場の紹介を行った。本発表では、香川県に設営されている日本初の縦型乾式メタン発酵施設にて行われた取り組みについて紹介する。当該施設では、乾燥した有機物を発酵槽に投入して、メタン発酵菌の効果を最大限に活かし、バイオガスを生成する特徴を有している。地域資源の循環に目を向け廃棄物の資源化や温室効果ガス削減など、地域に根ざしたバイオマスのエコシステムへの理解増進に期待できた。子ども向けの取り組みとしては、顕微鏡を用いて微生物の観察時間を取り入れ、紙製の素材がメタンガスになるまでの時間を利用してメタン発酵菌との文通企画を行った。施設見学を通じて原料の種類や処理方法によって発酵速度が異なる点を十分に伝えることが出来た。一方、見学者からの声では、乾燥した資材を発酵槽に投入する光景の見学だった為、理解増進に繋がっていない点も見受けられた。次回以降の取り組みでは、メタン発生量や分解速度は、AIにより適正に投入量が制御されている点も追記すべきと考えた。

O-06

学生スタッフ HUMs の活動～展示製作を通して～

○鎌田沙希¹・弘松瑤希²・南葉錬志郎¹・清原 愛²・藤原伊織³・吉朝 開²
・大崎壮巳¹・野崎このは⁴・黒島健介⁵

(¹広島大学大学院統合生命科学研究科・²広島大学理学部・³広島大学
生物生産学部・⁴広島大学総合科学部・⁵広島大学総合博物館)

広島大学総合博物館は開館当初より「キャンパスまるごとミュージアム」を推進して活動を行ってきた。広島大学総合博物館は、博物館本体（本館）は 250 m²と小さな博物館であるが、広島大学東広島キャンパス全体を博物館として捉え、キャンパス内に 7 つのサテライト館を持ちネットワーク化させている。さらにエコミュージアムの概念を取り入れ、東広島キャンパスの豊かな自然を活かした活動も行っている。このキャンパスまるごと博物館には「学生」も含まれており、学生による博物館活動も精力的に実施してきた。昨年度からは、学生スタッフ HUMs による企画展を博物館本館のみならず東広島市立美術館のスペースを借りた出張展示を行っている。

また近年、広島大学総合博物館は「地域まるごとミュージアム」を推進し、地域に根差した博物館活動を開始した。そのひとつとして昨年度の夏休み期間中に第 14 回企画展「県央に自然史博物館がやってくる!？」を東広島市豊栄支所で開催した。この企画展は、広島大学と東広島市との協働プロジェクト（TGO コモンプロジェクト）「Town-Gown 協働による（仮称）県央自然史博物館を核とした「知」の基盤整備と地域創生」の一環として開催されたものである。長年の豊栄でのオオサンショウウオの研究を分かりやすく 4 コマ漫画で紹介した「オオサンショウウオがいるらしい」、学生スタッフ HUMs が作成した生き物のカタチに注目した「生き物のカタチ」、さまざまな昆虫を展示した「昆虫の世界」の展示に加えて、子供の好奇心をくすぐるフリースペース「生き物寺子屋」を設置した。また、計 11 回の関連イベントも開催した。この企画展には学生スタッフ HUMs も携わり、「生き物のカタチ」、「生き物寺子屋」の作成、関連イベント「さわって、さがそう、いろいろなカタチ」を企画・実施した。また、会期期間中は生き物寺子屋に学生スタッフが常駐し、子供の質問などに応じた。今回の発表では、学生スタッフによる活動を豊栄支所での企画展を中心に課題点も含めて報告する。

地域の記憶「共創」アーカイブ事業 ななはく！と山形アーカイブ

○佐藤 琴¹・小幡圭祐¹・堀井 洋²・小川歩美²・大月希望³
(¹山形大学附属博物館・²合同会社 AMANE・³東京大学大学院)

令和 5 年 4 月 1 日に施行された改正博物館法には、博物館が取り組むべきこととして「地域のあらゆる主体との協働」と「博物館資料のデジタル・アーカイブ化」が明記された。それに先んじて、山形大学附属博物館が中核館となって山形市の博物館や民間会社と実行委員会を組織し、令和 4 年度(2022)博物館機能強化推進事業(Innovate MUSEUM 事業)に「地域の記憶「共創」アーカイブ事業」を申請し、申請額満額(370 万円)で採択を受けた。本事業は主に二つの事業からなる。一つは「ななはく！」である。実行委員会の構成団体のうち山形まちづくり株式会社と山形大学附属博物館が、山形市の中心市街地である七日町の風景や市民のオーラルヒストリーを収集する取り組みである。「ななはく！」とは我々の取り組みを山形市民に周知するために 2 月と 9 月に実施するイベントの名称である。山形大学の学生が収集したまちの風景やインタビューを展示と老舗の店主が話す七日町にまつわる思い出を聞く会などを行っている。もう一つは「山形アーカイブ」である。本年は山形市の博物館である最上義光歴史館と山形市郷土館、そして、山形大学附属博物館の所蔵資料の一部を公開するデジタル・アーカイブを構築した。「無理をしない」「足りないリソースを補い合う」「オープンソースを用いて開発費を抑える」「利用者が楽しい」ことを目指した。本アーカイブはジャパンサーチとも連携し、これからも各博物館が所蔵している資料を追加していくとともに、「ななはく！」で収集した現代の風景や個人が所蔵している資料なども掲載していく予定である。



O-08

「第3期中期目標・中期計画」に基づく 京都大学研究資源アーカイブ利用者満足度調査 結果と展望

○齋藤 歩¹・天野絵里子²

(1 京都大学総合博物館・2 京都大学学術研究展開センター)

京都大学研究資源アーカイブ (Research Resource Archive, Kyoto University。以下 KURRA) は、京都大学における教育研究の過程で収集・作成された資料群 (研究ノート、講義ノート、研究会レジメ、フィールド・ノート、調査写真等) を、「アーカイブズ」として永続的に保存して学内外の教育研究で利用可能とする取り組みである。2000年代中頃からの前身となる活動を経て、2008年より KURRA としての活動を開始した。

2022年には、京都大学の「第3期中期目標・中期計画」に基づき「京都大学研究資源アーカイブ利用者満足度調査」を実施して、第3期にあたる2016年度から2021年度までの資料利用者と事業申請者とを対象 (計120名) に二種類のアンケートを用意して、オンラインで回答を求めた。調査の結果として、KURRAの活動を10項目の特徴にまとめた。さらに、ここから六つの課題を抽出して対応策を検討した。抽出されたのは、利用の主体 (学生の利用が少ない)、利用対象の検索 (資料を見つけにくい)、利用申請の手続き (利用区分が不明瞭) 等に関する課題であった。

本発表では、調査結果を報告し、導き出された課題について対応策を示すことにより今後の展望を述べる。その際、アーカイブズ学 (Archival Science) における利用者研究を参照して調査結果を考察することで、アーカイブズが教育研究へ資する可能性を検討する。

京都大学研究資源アーカイブの特徴と課題

-
- (1) 幅広い年齢層と職業からの利用がある。ただし、学生による利用が少ない

 - (2) 「掲載」「展示」の利用が中心。ヘビーユーザーも存在する

 - (3) KURRAを知ったきっかけは、資料利用者は「知人の紹介」、事業申請者は「印刷物」が上位。SNSや外部サイト経由は0件

 - (4) 目的達成度は高く、再び利用／事業を望む意見が多数。事業の進捗報告が不足していることについて、明確に不満を表明する意見も存在する

 - (5) 現在の利用方法への低い評価がある (資料の見つけにくさ、利用区分の不明瞭さ)

 - (6) 現在の調査依頼書／研究資源化申請書に対する低い評価は少ない。ただし、研究資源化申請までの流れ、対象資料の範囲について、わかりにくさが指摘された

 - (7) 手続き時間の短縮を希望する意見がある (利用までの時間、事業化決定までの時間)

 - (8) 資料利用者、事業申請者ともに、KURRAが提供する教育研究支援機能への満足度は高い

 - (9) アーカイブズの専門性に基づいた活動が評価された

 - (10) 事業継続を望む意見は多数。リソース確保の危惧、制度上の工夫のアイデアが寄せられた

博物館法改正に伴う大学博物館の在り方

栗原祐司
(国立科学博物館)

令和 4 年 4 月に博物館法が改正され、本年 4 月から施行された。これにより、公私立大学の博物館は登録博物館の対象となったが、国立大学博物館は国及び独立行政法人が設置する博物館同様に対象外となった。

博物館法制定以来、大学を含む学校博物館は登録博物館の対象外とされてきた。平成 20 年の博物館法改正でも、『これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議報告』（平成 18 年 9 月）において「大学博物館等についても、学校教育法や国立大学法人法等との関係にも留意しつつ、博物館登録制度の対象に位置づける方向で引き続き検討する」と提言されたものの、実現はしなかった。

国立大学博物館は、平成 16 年 4 月の法人化に伴い、国立大学法人法第 37 条第 2 項で「博物館法その他政令で定める法令については、政令で定めるところにより、国立大学法人等を独立行政法人通則法第 2 条第 1 項 に規定する独立行政法人とみなして、これらの法令を準用する。」と規定され、独立行政法人並びとなっている。今回の法改正では、「我が国の博物館に関する法令においては、国立博物館に係る独立行政法人個別法令等と、公立・私立博物館に係る博物館法が、両輪として体系を構成しているのであり、実務上は、博物館法の登録の対象とする必要は必ずしもないと考えられる。」（文化審議会答申「博物館法制度の今後の在り方について」（令和 3 年 12 月 20 日））とされ、事実上登録博物館の対象外とされたのである。

一方で、「国又は独立行政法人が設置する指定施設は、博物館及び他の指定施設における公開の用に供するための資料の貸出し、職員の研修の実施その他の博物館及び他の指定施設の事業の充実のために必要な協力を行うよう努めるものとする。」（第 31 条第 1 項第 6 号）と、初めて国立施設に関する規定が設けられた。国立大学博物館と公私立大学博物館とでは役割は異なるのだろうか。博物館法令の今後の課題について問題提起する。

O-10

コロナ禍で来館者が・・・
 スタッフががんばった結果
 「鎌倉殿とほか3人～大河ドラマに便乗展～」

大喜直彦
 (山形大学附属博物館)

2020年以来の新型コロナウイルス感染症の拡大で、大学当局の基本方針により長期の休館、開館しても入館人数制限、体調確認などの規制のオンパレード、通常のようにフリーな全面開館はできませんでした。

当館は大学附属博物館であるので、大学生を積極的に呼び込み集めようと思うものの、密でコロナ発生の可能性も高くなるので、それすらやりにくくなりました。

なんとも、悩みの多い、つらい数年間でした。これは他の館でも同じだったと推察します。

今回はこのような状況の中、2022年度の企画展「鎌倉殿とほか3人～大河ドラマに便乗展～」については、当館スタッフが、なんとかアイデアをひねり出し、発表タイトルの展示を実施しました。ここでは、その展示に向けて、考えたこと、努力したこと、苦労したことなどを、以下の点でご報告します。

- ① タイトルは、時機を得て気を引く奇抜なインパクト→ 便乗展
- ② 内容は、意外にも学術、堅実、良い列品→ 重要文化財 中条家文書
- ③ PR、努力し、照れを隠して大騒ぎ→ 努力の賜物 成りきりスタイル
- ④ 解説は、丁寧、平易、面白く→ 解説のいろいろ

さて、がんばった結果は・・・



創立 20 周年記念展 「MOU 収蔵品展—創立からもう 20 年—」を開催して

○伊藤 謙¹・三島美佐子²・船越幹央¹・河原源太¹
(¹大阪大学総合学術博物館・²九州大学総合研究博物館)

「地域に生き 世界に伸びる」がモットーの大阪大学に、2002 年（平成 14 年）に創立された大阪大学総合学術博物館（The Museum of Osaka University：略称 MOU）は、本学の精神的源流で大坂町人の学問所である懐徳堂と適塾や、大阪帝国大学（1931 年創立）以来の教育研究の成果である学術資料の収集・保存・展示を使命とするとともに、地域社会とも密接に連携して、本学の歴史から最新の教育・研究成果までを学内外に紹介する重要拠点として活動してきました。

博物館創立 20 周年の節目を記念し、未公開の寄贈・寄託資料を中心に公開する記念展覧会「MOU 収蔵品展 - 創立からもう 20 年 -」（2022 年 10 月 24 日 - 12 月 17 日）を開催しました。展覧会場を、アート作品、収蔵品の教育への活用、教員の研究資料、卒業生の資料の 4 つのカテゴリーに分け、MOU の多様な活動や役割について紹介しました。

展覧会では、MOU の教育活動を紹介しました。MOU では 2010 年度より学内実習を担当しており、実際の収蔵品を用いた“模擬展覧会”の企画・開催を行ってきました。実際の展覧会開催と同じ手順で、展覧会のコンセプトづくりから展示空間のデザイン、ポスター・チラシの作成、資料・解説パネルの展示に至るまで、学生たちが主体となって展覧会を作り上げていきます。この学び中で、学芸員となって巣立ち、研究テーマを決定づけられた学生もいます。本展では、模擬展覧会において使用されてきた収蔵品や学生によって作成されたポスターを展示し、教育活動の一端を紹介しました。本展覧会で初公開したものに、豊中市所蔵の日本絵画、大阪大学吟詩部の資料があります。前者は地元自治体との連携を公開する場となり、後者は学生史保存の実例を示すこととなりました。展覧会では他に、科研の成果公開の一環として、MOU 所蔵の鉦物群、大阪大学外国語学部（旧大阪外国語大学）の什器類を公開しました。特に後者は、九大博における歴史的什器研究の知見を取り入れ、大学間連携研究のアウトリーチの場となりました。

本発表では、以上の成果の概略を、ご説明させていただきます。

展示什器としての額縁—旧額の調査研究を通じて

中江花菜
(東京藝術大学大学美術館)

近年、歴史資料的に価値の高い什器を再利用して作品を展示する機会が増えている。東京国立博物館で開催された展覧会『国宝 東京国立博物館のすべて』(2022年)で改修・使用された博物館開館当時の展示ケースや、インターメディアテク(東京大学総合博物館)におけるギメ美術館(フランス)から寄贈された大型ガラスケースでの展示は記憶に新しい。

総合芸術大学に付属する東京藝術大学大学美術館特有の什器として「額縁」が挙げられる。一般的に、額縁は作品を保護し、作品の印象をも左右する重要な役割を果たす。その一方で、取り替え可能な付属品として容易に交換・廃棄され、展覧会図録や目録の画像からはトリミングされてしまう存在である。それゆえに、額縁の交換に関する記録が残ることは近年までは非常に稀なケースであった。だが先述の大型ガラスケースと同様に、額縁は作品が制作された当時、あるいはその後の展示環境を知るために重要な資料となりうる。当館には、取り替えられたのちに何らかの理由で置きかれた額縁(通称:旧額)が残されており、その多くには東京藝術大学の前身である東京美術学校(1889[明治20]年開校)の焼印が押されている。

発表者は2021年度大学博物館等協議会・第16回日本博物科学会(オンライン開催)において、当館所蔵の絵画を囲む額縁についての発表を行った。本調査は前回の発表を発展させ、当館に残された旧額を調査し、その額縁がどのような資料性を持つか明らかにすることを目的としている。本発表では、これらの過去の什器群からどのような情報を得ることができ、今後の調査・研究につなげることができるのかという問題を、額縁という事例を通じて紹介する。

◆本発表は2021-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号21K00168)による研究成果の一部です。

参加者名簿

氏名	所属機関・部局	協議会	博物 科学会	発表 (登壇者)	特別見学会
1 加藤 克	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園	○	○		植物園
2 染矢 楓久	北海道大学農学院		○		総合博物館
3 木村 智	弘前大学資料館	○			総合博物館
4 西川 治	秋田大学大学院国際資源研究科附属鉱業博物館	○	○	P-06	総合博物館
5 大喜 直彦	山形大学地域教育文化学部・山形大学附属博物館	○	○	O-10	総合博物館
6 大友 幸子	山形大学地域教育文化学部/山形大学附属博物館	○	○		植物園
7 佐藤 琴	山形大学学術研究院・山形大学附属博物館	○	○	O-07	
8 押野 美雪	山形大学附属博物館	○	○		総合博物館
9 鈴木 郁子	山形大学附属博物館	○	○		総合博物館
10 高嶋 礼詩	東北大学学術資源研究公開センター	○	○		
11 黒柳 あずみ	東北大学学術資源研究公開センター	○	○		
12 佐藤 充	東北大学理学部	○	○		総合博物館
13 寺門 臨太郎	筑波大学芸術系		○	O-03	
14 西秋 良宏	東京大学総合研究博物館	○			
15 佐々木 猛智	東京大学総合研究博物館	○	○	S-03	総合博物館
16 熊澤 弘	東京藝術大学大学美術館	○	○		
17 中江 花菜	東京藝術大学大学美術館	○	○	O-12	総合博物館
18 宮川 寛	東京藝術大学大学美術館	○			総合博物館
19 山崎 鯛介	東京工業大学博物館	○	○		
20 上田 裕尋	東京農工大学科学博物館	○	○	P-02	総合博物館
21 齊藤 有里加	東京農工大学科学博物館	○	○		総合博物館
22 金子 敬一	東京農工大学工学研究院先端情報科学部門	○	○		総合博物館
23 栗原 祐司	国立科学博物館	○	○	O-09	
24 有田 寛之	国立科学博物館・科学系博物館イノベーションセンター	○	○		植物園
25 西谷 大	国立歴史民俗博物館	○	○		
26 本間 友	慶應義塾ミュージアム・commons	○	○		
27 宮北 剛己	慶應義塾ミュージアム・commons	○	○		総合博物館
28 明石 枝里子	慶應義塾大学	○	○		総合博物館
29 板垣 清子	慶應義塾大学	○	○		総合博物館
30 篠原 和大	静岡大学人文社会科学部	○	○		総合博物館
31 門脇 誠二	名古屋大学博物館	○	○		
32 梅村 綾子	名古屋大学博物館	○	○	S-02	
33 熱田 信貴	名古屋大学博物館	○	○		
34 松永 篤知	金沢大学資料館		○	P-05	総合博物館
35 藤原 真理	金沢大学資料館	○	○		総合博物館
36 永益 英敏	京都大学総合博物館	○	○		総合博物館
37 本川 雅治	京都大学総合博物館	○	○	O-02	総合博物館

大学博物館等協議会 2023 年度大会・第 18 回日本博物科学会 案内・要旨集

38	塩瀬 隆之	京都大学総合博物館		○	O-01	
39	村上 由美子	京都大学総合博物館	○	○	P-04	植物園
40	佐々木 智彦	京都大学総合博物館		○		総合博物館
41	齋藤 歩	京都大学総合博物館	○	○	O-08	総合博物館
42	松沼 瑞樹	京都大学総合博物館	○	○	P-03	
43	川俣 昭	京都大学総合博物館	○	○		総合博物館
44	天野 絵里子	京都大学学術研究展開センター	○	○	o-8	総合博物館
45	並木 誠士	京都工芸繊維大学・美術工芸資料館	○	○		
46	船越 幹央	大阪大学総合学術博物館	○	○		総合博物館
47	豊田 二郎	大阪大学総合学術博物館	○	○		植物園
48	横田 洋	大阪大学総合学術博物館	○	○		総合博物館
49	辻野 博文	大阪大学総合学術博物館	○	○		植物園
50	伊藤 謙	大阪大学総合学術博物館		○	O-11	植物園
51	波瀬山 祥子	大阪大学総合学術博物館	○	○		総合博物館
52	川添 勝仁	大阪大学共創推進部博物館・適塾記念センター等事務室	○	○		
53	野口 悦	大阪大学大学院医学系研究科医学史料室	○	○		植物園
54	山崎 達哉	大阪大学中之島芸術センター	○	○	P-01	植物園
55	島田 昌一	大阪大学適塾記念センター	○			
56	松永 和浩	大阪大学適塾記念センター	○	○		総合博物館
57	清水 則雄	広島大学総合博物館	○	○	S-01	植物園
58	時元 省二	広島大学総合博物館	○	○		総合博物館
59	黒島 健介	広島大学総合博物館	○	○		総合博物館
60	鎌田 沙希	広島大学大学院統合生命科学研究所	○	○	O-06	総合博物館
61	寺林 優	香川大学博物館	○	○		
62	篠原 涉	香川大学教育学部・香川大学博物館	○	○		
63	松本 由樹	香川大学農学部	○	○	O-05	総合博物館
64	永田 裕美	香川大学大学院農学研究科	○	○	O-04	総合博物館
65	吉田 広	愛媛大学ミュージアム	○	○		総合博物館
66	宮本 一夫	九州大学総合研究博物館	○	○		
67	三島 美佐子	九州大学総合研究博物館	○	○		総合博物館
68	中西 哲也	九州大学総合研究博物館	○	○		総合博物館
69	山本 太郎	長崎大学熱帯医学研究所熱帯医学ミュージアム	○	○		総合博物館
70	本村 浩之	鹿児島大学総合研究博物館	○	○		
71	辻 瑞樹	琉球大学博物館（風樹館）	○			
72	中川 千種	所属なし	○	○		

運営担当館

73	坪田 敏男	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館
74	大原 昌宏	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館
75	湯浅 万紀子	北海道大学総合博物館	○	○	S-04	総合博物館
76	小林 快次	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館
77	江田 真毅	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館
78	阿部 剛史	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館
79	田城 文人	北海道大学総合博物館水産科学館	○	○		総合博物館
80	首藤 光太郎	北海道大学総合博物館	○	○		植物園
81	北野 一平	北海道大学総合博物館	○	○		総合博物館

大学博物館等協議会 2023 年度大会・第 18 回日本博物科学会実行委員会

委員長：坪田 敏男（北海道大学総合博物館）

委員：湯浅万紀子・大原昌宏・小林快次・江田真毅・阿部剛史・田城文人・首藤光太郎・北野一平（北海道大学総合博物館）

大学博物館等協議会 2023 年度大会
第 18 回日本博物科学会
大会案内・要旨集

発行日：2023 年 6 月 22 日

編集：大原昌宏・阿部剛史・田城文人・首藤光太郎

発行：大学博物館等協議会 2023 年度大会
第 18 回日本博物科学会実行委員会

発行所：北海道大学総合博物館

〒060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM



北海道大学総合博物館